

8505 数ある生きものの中で人間ほど・・・

数ある生きものの中で人間ほど永生きをするものはない。蜉蝣が夕暮を待って死に、夏の蟬は春や秋を知らないというように短命なものもいるのだ。しみじみと一年の月日を送り過ごすだけでも随分のんびりとしたものではなかろうか。流れすぎる歳月を惜しいと思ったら、たとえ千年生きてみたとしても、その千年は一夜の夢のように短いと感じられることであろう。永遠に生き続けることのかなわぬこの世であるから、ついには自分の老醜の姿をさらすことになる。

高橋 義孝『すこし枯れた話』

[許容訳例]

Of all the numerous living creatures, none lives as long as man. Some creatures are very short-lived: the life of a dayfly lasts no longer than a day, and a cicada born in summer cannot experience spring or autumn. We human beings, indeed, live a truly leisurely life, since we can at least appreciate daily life throughout the whole year. If you feel it a pity that time flies so fast, even to live for a thousand years would seem to you as short as a dream. In this world you cannot live for ever, and you live long, only to be an ugly old man.

[翻訳例]

Of all the many different living creatures, none lives as long as man. Some, indeed, are extraordinarily short-lived: the mayfly lives only till dusk on the same day, the summer cicada knows neither spring nor autumn. It makes one feel, as a human being, what a luxury it is just to be able to savor the whole year in one's own time. To the man who bemoans the passing of time, even a thousand years of live world slip by like a dream. But since in fact it is not permitted in this world to live for ever, everyone is obliged, in the end, to don the ugliness of age.

■数ある生きものの中で人間ほど永生きをするものはない。(8505)

★「数ある～」という日本語は「すべての～」を含んで使われるのが普通です。したがって、all the numerous ~とか all the many different ~です。

★「生きもの」という言葉を日本人は無意識のうちに二つの意味、「命あるもの」と「生きているもの」で使っています。これは日本語にはよくある現象で、たとえば、ロダンの彫刻は「考える人」となっていますが、ポーズは「考えている人」です。英語では区別しますが、ここは creatures でも living creatures でもいいし、living things を用いても構わないと思います。なお、この living は creatures which are living という「連体修飾節（生きている）＋不定代名詞的体言（もの）」の英語化を短縮した形です。

★「・・・の中で」は of か among ですが、使う文構造に違いがあります。（●参照）

★「人間」は、ここでは種属を言っているのではなく、あくまでも「一人一人の人間(が長生きする)」ということですから man が最もいいでしょう。human being(s)も使えますが、mankind(人類)は総称になってしまうので適当ではありません。

◆no + longer than と no + as long as

「人間ほど永生きするものはない」という日本語を忠実に訳すと None [No other living creature] lives as long as man.となります。None lives longer than man.は、「人間以上には長生きするものはない」ということで、厳密に考えると「人間と同じくらい長生きするものはいないかもしれない」ということになりかねません。なお、living creature を使う場合、other を入れないと、厳密には man は living creature ではないということになってしまいます。たとえば、No woman speaks English as well as he. /No other woman speaks English as well as she.のように使い分けるのです。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(人間ほど永生きをするもの)

「人間ほど永生きをするもの」は「連体修飾節(人間ほど永生きをする)＋不定代名詞的体言(もの)」ですから、英語では「名詞・代名詞＋関係詞節」で処理しますが、全文が「・・・ものはない」という否定文なので'There is none + that lives as long as man.'となります。また、この構文なら「～の中で」に among を使うことが出来ます。Among all the numerous creatures, there is none that lives as long as man.です。ただし、among を用いると「～の中を捜しても・・・ない」というニュアンスになることが多いです。たとえば、Among all the men I have met, I have never seen one with such large eyes as he.のように。

■蜉蝣が夕暮を待つて死に、夏の蟬は春や秋を知らないというように短命なものもいるのだ。(8505)

★「蜉蝣」は a mayfly ですが a dayfly とも言います。

★「夕暮を待つて死ぬ」は日本語に合わせて英語 (waits for evening to die) に訳しても意味が通じません。ここは「蜉蝣は(生まれて)その日のうちに死ぬ」(The mayfly is doomed to die at dusk on the same day [on the day it was born])とか「蜉蝣は生まれてその日の夕暮までしか生きない」(The mayfly lives only till dusk on the same day.)と変えなければなりません。ここで使う same は on the day on which it was born.ということです。ちょっとあいまいな表現ですが許されるでしょう。あるいは The life of a mayfly[dayfly] lives no longer than a day としてもよいでしょう。

★「夏の蟬」ですが「蟬」は夏に決まっていて「冬の蟬」は実際にはいないので、ここは「蟬」だけでよいのですが、次の「春や秋を知らない」を強調したいから「夏の」としたのでしょう。文学的な強調語句として「夏の」が加えられているのですから「夏の蟬」は the [a] summer cicada としましょう。これは具体的には the cicada which is known only in summer[which is characteristic of ~]というニュアンスが含まれることになり、ちょっと poetic な感じが出ていいと思います。なお、a cicada born in winter を連想させてしまいますが a cicada born in summer でも許されるでしょう。

★「(夏の蟬は) 春や秋を知らない」は cannot experience spring or autumn と書くことが出来ますが、素直に knows neither spring nor autumn とした方がいくぶん気取りも感じられて、ここではふさわしいと思われます。

★「・・・というように」は「たとえば・・・というように」と言い換えることができるので本体の文をコロン(:)で締めて、例を並べるとというのが最も気がきいていると思います。このコロン(:)は「具体的な例を挙げるなら、即ち・・・」という感じです。

★「短命なものもいる」は Some (creatures) are extraordinarily[very] short-lived です。なお、ここで die young は使えません。これは、たとえば、He died young.とは When he died, he was still in a young condition. という意味です。また、live short という表現はありません。die very short は可能ですが、「背が伸びるはずのところを低いまま死んだ」という意味で、ここでは使えません。

★「・・・のだ」といういくらか詠嘆的断定を表すには indeed(=in fact)(実際[実に])を加えて Some indeed are extraordinarily [very] short-lived とするいいと思います。

●文構造

「～のように短命なものもいるのだ」の「～のように」は「たとえば～のように」と例を挙げているわけで、話の本筋は「短命なものもいるのだ」です。したがって、英語では、「中には短命なものもいるのだ(Some, indeed, are extraordinarily short-lived), たとえば(:), 蜉蝣は・・・(the mayfly lives only till dusk on the same day), 夏の蟬は・・・(the summer cicada knows neither spring nor autumn.)」と文の構造を組みかえる必要があります。

■しみじみと一年の月日を送り過ごすだけでも随分のんびりとしたものではなからうか。(8505)

●文の解釈

高橋義孝氏は名エッセイストとして知られた人です。ドイツ文学を専攻した学者にしては非常に日本的です。つまり、日本人独特の感情を日本語独特の言いまわしの中に込めて伝えるということです。したがって、当然のことながら、そのまま英語に訳すことは不可能と言ってよいでしょう。日本語の論理をくずして、英語の論理に置きかえなければならないからです。この「しみじみと一年の月日を送り過ごすだけでも随分のんびりしたものではなからうか」も、いかにも日本語らしく、主語が抜かしてあります。そのために、文章上の主語は「人間」でありながら、全体は筆者の主観的感想となっています。英語に変換するために、まず、論理的な主語を補って書き改めると「少なくとも人間は一年の月日(四季の移り変わり)を知ることができるのであるから、それだけでも他の短命な生きものに較べれば随分のんびりしたものではなからうか。」となります。この「随分のんびりした」が、筆者独特の使い方のように感じられます。たぶん、「随分時間があって、ゆっくり過ごせてありがたいことではないだろうか」と解釈することで意味が通じるようになると思います。

★「しみじみと」は、辞書には deeply; keenly; heartily; quietly などが出ていますが、ここは「(しみじみと～を) 送り過ごす」となっていて、この「送り・・・」があることによって、

単に「ゆっくりと過ごす」と違って「ゆったりと～を味わい過ごす」という意味が込められている感じがします。英語でもその感じが出るように工夫する必要があります。

★「・・・だけでも」は at least が浮かびます。

★「しみじみと一年の月日を送り過ごすだけでも・・・」を We spend at least all the year deeply と訳すと「ほかに何もとりたててすることがないので、少なくとも一年中・・・に集中してすごす」という意味になってしまいます。ここは、「少なくとも人間はゆったりと一年の月日を味わい過ごして、四季の移り変わりを知ることができる」という意味なので (since) at least we can appreciate the whole year in [through] our daily life とか、あるいは、主語を変えて just to be able to savor the whole year at leisure ぐらいでしょう。at leisure (in one's own time) というのは「他のことは気にしないで；死ぬことなど気にしないで」という感じです。just to be able to savor は「(他のことは気にしないで)～を味わえるだけでも・・・」という気持ちです。

★「随分のんびりしたものではなかろうか」は「・・・(できる)とは、(他の短命な生きものに比べると) なんとぜいたくな [ありがたい] ことではないか」と考えて (, as a human being,) what a luxury it is just to be able to savor... とします。この luxury は What a luxury it is to lie in a hot bath after a hard day's work. のように、いわゆる物質的な意味での贅沢とは違う意味です。他には we human beings lived a leisurely life, since... としてもいいでしょう。もとの日本語は「随分のんびりしたもの」となっていますが、ここはこういう表現に言い換えるしか方法がないと思います。辞書を引くと「のんびりした」には quiet; easy; carefree などが出ていますが、ここではいずれもびったりしません。また、「随分」には rather; pretty; very (much) などがでてきますが、ここでは使えません。

★「・・・ではなかろうか」は I would say... に相当するでしょうが、これは、たとえば、日常会話などで遠慮がちに自分の意見を述べるような時なら使えます。ここはそうした会話ではないので、ちょっと無理だと思います。ここでは日本語の裏にひそんでいる断定性を表に出して「そんなわけで、我々はなんと・・・か、と感じるのだ」、つまり、It makes one feel (, as a human being,) what a luxury it is just to be able to savour the whole year at leisure. とか、あるいは It makes one feel that we human beings live a leisurely life, since at least we can appreciate the whole year in [through] our daily life. とかにするといいのではないかと思います。やはり、直訳は無理のようです。

■流れすぎる歳月を惜しいと思ったら、たとい千年生きてみたとしても、その千年は一夜の夢のように短いと感じられることであろう。(8505)

●文の解釈

「流れすぎる歳月を惜しいと思ったら、たとい千年生きてみたとしても、その千年は一夜の夢のように短いと感ぜられることであろう。」はいかにも日本文らしく「惜しいと思ったら」の主語がなく、あいまいで非常にわかりにくい文章です。そのまま訳すことはできません。たとえば、「惜しいと思ったら」の部分は、いづらか哲学的というか、文学的表現なの

か曖昧なので一般人称の you を主語にすることもできるし、具体的に「・・・を惜しいと思う人」を主語にすることも出来ます。具体的にとらえると「流れゆく歳月を気にしているような人は、たとえ千年生きたとしても、その千年を夢のように短く感じるであろう。」と解釈することになります。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(流れすぎる歳月)→名詞句

「流れすぎる歳月」は「連体修飾節(流れ[そして]すぎる)＋不定代名詞的体言(歳月)」で、普通は「名詞＋関係詞節」で処理するのですが、「歳月」は「流れすぎる」の主語なので、たとえば、「修飾語句の付かない連体修飾節(シェクスピアが書いた)＋不定代名詞的体言(作品)」→「名詞(works)＋関係詞節(Shakespeare wrote)→the writings of Shakespeare(シェクスピアの作品)のように、一般に、動詞・形容詞由来の名詞の場合、「動詞・形容詞由来の名詞＋of＋主語」(the death of his father(彼の父親の死); the outbreak of the world war II(第二次世界大戦の勃発); the difficulty of loving a neighbor(隣人を愛することの難しさ))の形で処理することが出来ます。ここも「時が流れる」も「時が過ぎる」も動詞は pass なので the passing of time と noun phrase で処理出来ます。なお、clause で処理するなら that time flies so fast [like an arrow] としてもよいでしょう。

★「(流れすぎる歳月を) 惜しいと思ったら」は一般人称を使うなら If you feel it a pity (that (time flies so fast)とか If you are the kind of person who think it a pity (that time flies so fast) …も許されるでしょう。ただし、「惜しい」(it's a pity that…)に pity を使うのはちょっと弱くて物足りない気がします。pity は、たとえば、What a pity you couldn't come yesterday. というように使いますが、あまり主観的な気持ちが入らないのです。つまり、客観的な事実に対してただ残念だ、という感じになります。それから、ここを「惜しいと思う人に(とって)は・・・」とすると、「惜しいと思う人」は「連体修飾節(惜しいと思う)＋不定代名詞的体言(人)」ですから(to) the man who regrets [bemoans] the passing of time, …となります。

★「たとい千年生きたとしても・・・」は Even if you live for a thousand year, …と書くことも出来ますが、Even to live for a thousand year [Even a thousand years of life] would…とすれば、仮定を含ませることが出来ます。

★「一夜の夢のように短い」は直訳すると as short as a nights' dream ですが、この「一夜の」は「千年・・・」に対して「短さ；はかなさ」を強めるために加えられた修飾語でしょう。英語では like a dream と言えば、それだけで「短さ；はかなさ」が出ますから、night's は省いて使うのが普通です。

★「短いと感じられることであろう」は Even if you…で始めるなら you would feel it …ですが、上で feel を使っているので、ここは Even to live for a thousand year を主語にして would seem to you as short as a (nights') dream とか、Even a thousand years of life を主語にして would slip by like a dream とした方が自然の英語になります。slip by[away; on]は the years とか time を主語にしてよく使われます。

■永遠に生き続けることのかなわぬこの世であるから、ついには自分の老醜の姿をさらす

ことになる。(8505)

●文の解釈

「永遠に生き続けることのかなわぬこの世であるから、ついには自分の老醜の姿をさらすことになる。」は最も英語にしにくいところです。筆者の言いたいことは「人間は[人は]だれでもこの世界に永遠に生きすることはできないので、ついには(短命な生き物は見せることのない)自分の老醜の姿をさらすことになる」ということでしょう。「老醜の姿」は「老醜」だけでいいと思います。「さらすことになる」とは「さらさざるを得なくなる」ということです。したがって、「人間はこの世界に永遠に生きすることはできないので、みんな自分の老醜をさらさざるを得なくなるのである。」と言い換えて訳すことにします。

★「永遠に生き続けることのかなわぬ」は「永遠に生き続けることはできない」ということですから it is not permitted to live for ever とか, we [you; one] cannot live for ever とかでしよう。

★「この世」は in this world でしょう。

★「ついには」は in the end です。at last は「ついには・・・になった」という意味ですから、ここでは使えません。なお、「ついには[しよせん]・・・することになる」には only to be...という「結果の不定詞」でも表すことができます。

★「自分の老醜の姿」は the ugliness of age です。「姿」は訳すには及びません。

★「さらす」は the ugliness of age を用いるなら、少々文学的に don (<do on) を使ってもいいでしょう。

★「(さらす) ことになる」は(everyone) is obliged to...か, (and you live long,) only to be an ugly old man と書くことも出来ます。

●翻訳後記

この文章は非常に難しく、日本文をそのまま英語に置き換えることのできないところがあるいくつかあり、表現を変えて訳す必要があります。それでも英語らしい自然な文章にするという点で、かなり問題があります。さらに、文章と文章のつながりというか、論理性についても問題があるように思われます。特に後半の部分は日本語の表現を出来るだけ生かそうとして無理した英文という感じは免れないと思います。